

ジョルジュ・サンド—ギュスターヴ・フロベール 往復書簡を読む (IV)

持田明子

(1997年9月24日受理)

1867年、フランスは1855年に次ぎ2度目のパリ万国博覧会を開催した。二月革命以後、加速度的な進展を見せた産業革命は60年代半ばに完了段階に達したが、その目覚ましい技術革新の成果を世界に誇示するものであった。首都パリは、1853年よりセーヌ県知事の任にあったサン＝シモン主義者オスマンが、皇帝ナポレオン3世の命を受けて遂行した徹底的な大改造——オスマニザションという新語さえ生まれた——により美しい近代都市に変貌し、この時代、名実共にヨーロッパ文化の輝かしい中心であったことは周知のとおりである。

そして、チュイルリー宮殿を舞台にして、皇帝夫妻を中心に繰り広げられる華やかな宮廷生活は、社交とモードの中心であるばかりか、金融資本家や、商工業者ら大ブルジョアジーの追求する物質主義の極みでもあった。〈パリの輝き〉に豪華な光が添えられたと言えよう。

6月10日、チュイルリー宮殿で、パリ万国博覧会を機に首都を訪れていたロシア皇帝アレクサンドル2世、プロシヤ国王ウィルヘルム1世に敬意を表した大舞踏会が催されたが、フロベールもウジェニー皇后より招かれた。6月12日付けの友人ジュール・デュプランへの手紙が伝えるとおおり、フロベールはさんざめく舞踏会の華やぎを大いに楽しみ、軽やかな衣ずれの音に包まれて、《ご婦人方に愛想を振りまき》ながらも、《一瞬たりとも文学を忘れることなく》、まばゆいばかりのシャンデリアの下に集まった人々を《十分に観察し》、《いずれ何かの折に利用しようと、目にしたもの、感じたもののすべてを記憶の片隅に貼りつけた。》⁽¹⁾〔手紙54〕は、眼前のきらびやかに着飾った人々の背後にくっきりと浮かび上がる同時代の社会をその脳裏に刻みつけたフロベールを明らかにする。

〔手紙54〕 フロベールよりサンドへ

クロワッセ

[1867年6月] 12日, 水曜日, 夜

大切な先生。

まず最初におたずねいたします。私の友モーリスと連れ立っていつクロワッセに来ていただけるのです？ あなたを求めているのは私だけではありません。母も同様です。母は1週間後に、ディエップとウヴィルにいる2人の孫娘のもとに出かける予定にしています。それから、博覧会を見物させるために7月末に母をパリに連れて行きます。あなたにお目にかかれる機会を逃すのはひどく残念なことですから、母はあなたのご予定に合わせます。こういうことです。ご遠慮はまったく無用です。お好きなときにいらっしゃってください（ただし8月を除いて）。できるだけ早い、そしてできるだけ長期間のご滞在が最も望ましいのです。

チュイルリー宮殿での舞踏会に出席するため、今週の初め、パリで36時間を過ごしました。冗談でなく、見事なものでした。パリは思うに巨大になっています。常軌を逸した、とてつもないものになっていきます。われわれはおそらく古代の東洋に戻っているのですね？ 私には偶像が今にも大地から湧き出てくるように思われます。人々はバビロンに脅かされているのです。どうしてそうでないことがありましょう？ 個人は〈デモクラシー〉からあまりに否定されたために、まるで、神権政治の大専制政治下のよう、完全に消滅するまで身を落とすことでしょう。

ロシアのツアーは私を極度に不快にしました。下品な男だと思いました。なんの危険もなく「ポーランド万歳」と叫ぶフロケ氏と並んで、^{シッフ}粹な人士がエリゼ宮で自分の名を書かせていました。いやはや！ なんと結構な時代でしょう！

小説の方は弱い足取りです。進むにつれて困難が生じます。切り石を積んだ、なんと重い荷車を引いていることか！ それなのにあなたは6か月続く仕事をこぼしておられる！ 私（の仕事）は少なくともあと2年かかります。あなたはいったいどのようにして思想のつながりを見出されるのです？ 私の仕事を遅らせているのはまさにそのことです。おまけに、この小説にはうんざりするほどの調査が必要です。というわけで、月曜日には〈ジョッキークラブ〉、〈カフェ・アングレ〉、そして代訴人の所と次々にまわりました。

ああ！ あの善良なシリーが『心の城』を読んだことをあなたにお伝えするのを忘れていました。私が理解したことは、彼がこの作品をまったく理解していないということです。したがって、熊は自分の穴に戻りました。

『パリ・ガイド』に寄せたユゴー翁の序文はお気に召しましたか？ それほどでもな

い、ではありませんか？ ユゴーの哲学は私にはいつも漠然としているように思われます。

1週間前、私はルーアンに住みついていたジプシーの野営に驚嘆しました。それを目にするのは3度目です。そのたびに新しい楽しさがあります。驚嘆するのは、彼らが羊のように無害であるのに、「ブルジョアたち」の「憎悪」をかき立てていたことです。私は彼らにわずかな金を与えたことで、群衆からひどく悪意のある目で見られました。そして、プリュドム風の警句を耳にしたのです。その憎悪は何か非常に深く、複雑なものに起因しています。あらゆる保守派の人間に見られます。それはベドウィン人、「異端者」、哲学者、隠者、「詩人」に人々が抱く憎悪と同じものです。そしてこの憎悪のなかに恐怖があります。私は常に少数者を支持していますから、そうした憎悪は私を激怒させるのです。確かに多くのものが私を激怒させます。私が憤慨することをやめればたちまち、私は支えを抜き取られた人形のようにぼったり倒れることでしょう。

この冬、私を支えた杭は、いわば偶像になったわれらが偉大な歴史家チエール氏に対する憤りでした。それに、小冊子の筆者トロシュ*と、絶えず勢いを盛り返すシャンガルニエです。ありがたいことに、博覧会の熱狂がこうしたいい加減な男たちからわれわれを解放してくれたのです。

さようなら、大切な先生。あなたを愛しているように、つまり、非常に強くあなたを抱擁いたします。いらしてください！ あなたの偉大な、大好きな顔を見ることができず、寂しく思っています。

Gve. フローブ⁽²⁾

* トロシュ将軍、「1867年のフランスの軍隊」

ここでフロベールが言及した『パリ・ガイド』はA. ジャコブによれば⁽³⁾、パリ万国博覧会に合わせて出版された、パリをさまざまな視点から紹介する論文集であり、ユゴーはその序文で、パリがユートピア的ヨーロッパの中心となる理想の未来を謳い上げた。フロベールが後にユゴー自身に親愛の情を抱き、サンドにもそれを繰り返して伝え⁽⁴⁾、一方、サンドもユゴーとの交友関係を奨励する言葉を書き送ることになる⁽⁵⁾のは興味深い。

〔手紙55〕 サンドよりフロベールへ

ノアン

[18] 67年6月14日

親愛なる心の友へ

今月20日、パリで2週間過ごすために息子夫妻と一緒に発ちます。『ヴィルメール』の再演が遅くなるようであれば、もっと長くなりましょう。[……]

ジプシーと言えば、海のジプシーがいることをご存知ですか？ 私はタマリスの近くで、人里離れた岩礁の間に、女や子供たちもいる、しっかり守られた大きな舟を発見したことがあります。彼らは沿岸に集団を作り、非常に数が少なく、赤銅色に日焼けし、食べるために漁をし、大した商売もせず、土地の人間の理解できない独自の言語を話します。[……]当然、土地の人間は彼らを忌み嫌い、彼らはいかなる種類の宗教も持たないと言います。もしそれが事実であれば、彼らはわれわれよりすぐれているにちがひありません。[……] 彼らは徹頭徹尾軽蔑の対象でした。なぜ？ 相も変らぬ事の繰り返しです。つまり、皆と同じようにしない人間は悪事しか働けない、というわけです。[……]

私は『パリ・ガイド』に気づきさえしませんでした。でも私に1部送って寄越すべきでした。何の報酬も求めずに、それに寄稿したのですから。もっとも、私が忘れられたのは、おそらくそのためですね。[……] ⁽⁶⁾

* * *

7月10日より、『ヴィルメール侯爵』がオデオン座で再演。

[手紙56] フロベールよりサンドへ

クロワッセ

[1867年7月18日] 木曜日

今、パリにいらっしゃるはずですね、大切な先生？ 2週間後もいらっしゃるでしょうか？ 博覧会を見物させるために母を連れてそちらにまいります。

『ヴィルメール』はお金になっていますか？ 近況をお知らせください。あなたがいらっしゃらなくて寂しいですよ。あなたを抱擁したくてなりません。

ブーヴ翁は立派でした、そうではありませんか？ 8月はずっと、家をあげざるを得

ません。しかし、9月の初めから2月半ばまでは、ますます私をうんざりさせている際限のない小説をはかどらせるために、ここを離れることはありません。私たちの秋の出会いの日程を決めなければなりません。これほど愛し合っているのに、こんなにわずかにしか出会わないのは愚かすぎます。

ですから、近いうちに。愛情をこめて。

老いたる

Gve. フロベール⁽⁷⁾

サント＝ブーヴは6月25日、上院で演説し、ヴォルテール、ルソー、ミシュレ、ルナン、サンドらの著書を民衆図書館で禁書にする法案に対し、反対意見を表明した。再びA. ジャコブによれば、上院でのサント＝ブーヴの影響力はもはや無きに等しく、その演説に耳を傾ける者はほとんどいなかったという⁽⁸⁾。

たとえば、きわめて宗教的な精神を持ったサンドが、とりわけ60年代、その反教権主義的立場を鮮明にして、ローマ・カトリック教会は本来のキリスト教教義を歪曲したとして、大胆・率直な批判の矢を放った。その結果、カトリック教会はじめ、その信奉者たちがサンドを〈悪魔〉呼ばわりして憎悪をあらわにし、激しい攻撃の対象としたことはよく知られている。上院でのサント＝ブーヴ演説の一件は、フロベールが飽くことなく嫌悪感を吐露している支配階級⁽⁹⁾の精神状況を垣間見せるものである。

〔手紙57〕 サンドよりフロベールへ

ノアン

〔1867年〕7月24日

親愛なる恋人へ。

あなたが到着なさるか、あるいは、あなたを抱擁しに行くよう私に命じるあなたからの一言^{ひとこと}が届くことを期待して、私は子供たちと一緒にパリで3週間を過ごしました。でもあなたは陥っておられました、仕事のこうした発作を私は尊重します。それを知っていますから！

私は古いノアンに帰って来ました。〔……〕

私は再び手を加えています*が、私は頑丈ではありません。パリでの精力と活動のつけを払っていますよ。なんでもないことです、私は人生を恨みはしません。

心からあなたを愛しています。気がめいっているとき、私はあなたの優しい顔を思い浮かべます。あなたの優しさがあなたの存在の力強さの周りに輝くのを感ずります。あなたは、身勝手さのない、したがって落胆することのない、私の甘美で純粋な友情の晩秋に出現した魔法です。ときどき私のことを考えてください。大いに仕事をして、のんびり散歩する気分になったら、私を呼んでください。それ以外はお気がねなく。こちらにいらっしゃるお気持ちになられたら、家族の皆が大喜びすることでしょう。

サント＝ブーヴに会いました。彼に満足し、また彼のことを誇らしく思っています。さようなら、心の友。母上とあなたを抱擁します。

G・サンド

『ヴィルメール』はうまくいっていると手紙で言ってきました。⁽⁹⁾

* 『メルケム嬢』

〔手紙58〕 フロベールよりサンドへ

クロワッセ

〔1867年7月27日〕土曜日

その言葉を削除しなければなりません、大切な先生。あなたにお会いしたいと思わないほど仕事に陥ってはいませんでした。今度のものを付け加えないまでも、私がこれまで、「文学」にかなりの犠牲を払って来たのは確かですが、「人間のように悪臭を放っていた」私の住まいの外壁を塗り直したのです。その結果、ルーアンの母の住居で2週間、次いで、庭の外れにある小さなあずま屋で1週間、過ごすことになりました。これが年老いた人に来てくださるようお願いしなかった理由です。しかし、9月以降はここで会いするのに何の妨げがありませんか？ 8月中は留守をします。私への手紙はタンブル大通り42番地にお送りください。

ところで仕事の方はいかがですか？ 『カディオ』はどうなりましたか？ 私は自分がピラミッドのように年老い、ロバのように疲れているのを感じます。母には私を陽気にする力がありません。母は衰え、気難しくなり、ふさぎこみ、私を悲しませます。母を博覧会に連れて行くのは少しばかり気晴らしをさせるためです。

それにもかかわらず私は仕事を辛抱強く続けています。今年の終りには第2部を書き上げていることを期待しているのですが。2年以内にすべてが完了することはないでしょう！ その後は「ブルジョアたち」に永遠におさらばです！ 人間の愚かさを掘りさ

げることほど疲れ果てるものはありません。

愚かさと言えば、政府筋はサント＝ブーヴ翁に激怒しているように思われます。カミーユ・ドゥーセの悲鳴は最高頂に達しています。未来の「自由」の見地から、われわれをかくも憤慨させている社交界の人士の宗教的偽善をたたえる必要がありますね！ 問題の解決は後になればなるほど、うまくいくでしょう。彼らは衰えるばかりで、われわれは強くなるだけです。

ブイエと一緒に、ファルスの台本を書きました。ノアンの劇場で上演すれば楽しいでしょう。ささいな仕事でないものを書くことが、確かに、まだ残っています。

さようなら、偉大で優しい、大切な先生。愛をこめてあなたを抱擁します。

Gve. フロベール

モーリスによろしくお伝えください。

ノアンにお伺いすることについては、ノルマンディー地方の人間らしく、「いいえとは言いません」とお答えします。2, 3日前になったらお知らせいたします。⁽¹⁰⁾

〔手紙59〕 サンドよりフロベールへ

ノアン

〔18〕 67年8月6日

小説を書くときのあなたの骨折りを目にすると、自分の容易さにかっかりして、私はいい加減な文学を作っているのだと思います。『カディオ』は終わりました。随分前からビュロの手に渡っています。別の作品*にかかっていますが、どういうものになるのかまだはっきり分かりません。太陽も熱もなく、何ができるでしょう？ 今は、パリにいて、思いのままに博覧会をもう一度見て、あなたと一緒に母上をご案内する方がいいのです。でも、懸命に働かなければなりません、生きていくためにこれしかないからです。そして子供たち！ オロールは本当に素晴らしい。この子をしっかり見ておく必要があります。これから先長くこの子を目にすることは多分ないでしょう。長く生きている運命にあるようには思われません。ですから急いで愛さなくてはなりません！

そうです、あなたのおっしゃるとおりです。それがまさに私を支えているのです。この偽善の発作は厳しい抗議を蓄積します。待っていて損はありません。それどころか、得をします。まだひどく若い老人であるあなたはそれを目にすることでしょう。あなたは私の息子の年齢です。この汚物の山が崩れ落ちるのを目にしてあなた方は一緒に笑うことでしょうね。

ノルマンディー地方の人間であってはなりません。何日か私たちに会いにいらっしや
らなくてはなりません。あなたは私たちを幸福にします。そして私の方は、あなたのお
出でで再び勇気が出、喜びが心に満ちることでしょう。

いつもあなたの老吟遊詩人を愛して、パリの話をしてください。時間がおありのとき、
ほんの数語を書き送ってください。ノアンのために登場人物が4、5人の構想を作って
くだされば、あなたに演じてお見せしましょう。

あなたを抱擁します。あなたを呼んでいます。

G. サンド⁽¹¹⁾

* 『メルケム嬢』

サンドはこの年の8月、35年という長い歲月、変ることのない友情で結ばれてきた
F. ロリナの突然の死に打ちのめされた。だが、癒やしがたい悲しみにあえぎながら
も、〔手紙59〕で言及された小説『メルケム嬢』のペンを棄てることはなかった。す
でに年老い、生活を共にした者ばかりか、親しい友の死に次々に遭遇し、フロベール
の言葉を借りるならば、《心の中に大きな墓地》⁽¹²⁾ができてしまった今、サンドにとっ
て、ペンを進めることだけがその悲しみを忘れる手だてであり、さらには生の証^{あかし}であ
ったのかもしれない。そして、サンドはこの『メルケム嬢』の舞台を探すため、ノル
マンディー地方を自ら歩いてみようとする。

〔手紙60〕 サンドよりフロベールへ

ノアン

〔1867年8月21日または22日〕

親しいあなた、こちらに来ようと思いついてくださったことに感謝いたします、でも、
病気の身で旅をなさらなかったのは賢明でした。ああ！ 何ということでしょう、私が
夢に見るのは病気と不幸ばかりです。お大事に、私の年老いた友。元気を取り戻せた
ら、お目にかかりに行きましょう。短刀の一突きのようなひどい苦しみを再度味わって
以来、私は弱々しくなり、すっかりまいっています。そして微熱がずっと続いています。
パリから一言^{ひとこと}書きましょう。あなたの都合がつかなければ、電報でお知らせください。
私に対しては弁明の必要のないことはご存知ですね。日々の生活で生じる不都合はよく
分かっています。私が、その誠意を知っている人々を非難することは決してありません。

私に手紙を書く時間がおありのときに、人々がよく行く場所には足を踏み入れずに、ノルマンディーの海岸を見るのに3日間をどこで過ごすべきか、教えてください。小説を書き進めるために、あまり話題になったことのない、そして、真の住民たち、つまり、農夫や漁師たちが暮らし、岩壁の片隅に真の村があるような、英仏海峡の景色を目にする必要があります。あなたがお元気でしたら、一緒に出かけましょう。そうでなければ、私のことはご心配に及びません。私はどこへでも足を運び、何ひとつ気にかけてせんから。海岸のこうした住人はこの地方で最もすぐれていると、不屈の真に善良な人々がそこにはいると、いつかあなたは私におっしゃいましたね。彼らの顔つき、服装、家、そして彼らの視界を目にすることは有益でしょう。私が書こうとしているものにはそれで十分です、副次的に必要なだけで、描写するつもりはほとんどありません。日焼けを斜めにつけることのないよう、見るだけで十分です。

母上はいかがお過ごしですか？ 散歩にお連れし、少しばかり気晴らしをさせてあげることができましたか？ 私があなたを抱擁するように、私の代りに母上を抱擁してください。

G. サンド

{……}

私が今の状態から抜け出すことができれば、再会いたしましょう。問題は眠れないことです。日中は周囲の者を悲しませないために努力をしすぎます。夜になると、再び自分の中に落ち込むのです。⁽¹³⁾

[手紙61] フロベールよりサンドへ

クロワッセ

[1867年8月] 25日、日曜日

アロマンシュとグランカンを訪れる人はありません（この2つの村はカーンの近くです）、ラングリュヌも同じように、ほんのわずかな海水浴客がいるだけです。しかし、風変わりな、「個性的な」場所は、トレポール（セーヌ＝アンフェリユール）の先、5リュエーのところにあるカユーです。砂が家々の屋根を越えて舞い、舟は、イリオンの浜辺のギリシャ人たちの舟さながらに砂利浜の上を引かれるのです。とはいえ、ノルマンディー地方の海岸をよく観察するには、大切な先生、ノルマンディーの季節、つまり、秋、10月まで待たなければなりません。最も美しい海岸はディエップとエトルタの近くにあります。海辺の内部については、オンフルール、トゥルヴィル、そしてヴィレルヴィル

を私は非常によく知っています。

ですから、小説が急がないのであれば、10月までお待ちになることをおすすめします。こちらにおいでください。ご一緒にひと巡りすることを考えましょう。あなたに直ぐにもお目にかかりたいと思っている私にとってではなく、事柄それ自体にとって、真冬はもっと適切でしょう。

私の方は相変わらず仙痛のために頭がぼうっとしています。

母が私に、代りにあなたを抱擁するようにと申します。母のため、そして私のために、抱擁いたします。あなたのご家族に私の友情を、そしてあなたに私の愛情を送ります。

Gve. フロベール⁽¹⁴⁾

* * *

一方、フロベールも、情報を必要としていた。前号で読んだ〔手紙44〕、〔手紙45〕で言及されたA. バルベスに関して、この時期、執筆中であった『感情教育』の時代背景となる二月革命の証人として大きな関心を抱いていたことはすでに触れたが⁽¹⁵⁾、サンドを介してこの1848年5月の民衆蜂起の指導者から直接証言を得ようとする。

〔手紙62〕 フロベールよりサンドへ

クロワッセ

〔1867年9月24日—25日〕火曜日、夜

大切な先生。

どうしてなのですか？ お便りがまったくないではありませんか？ あなたにお願いしたいことがありますから、すぐにお返事をください。

私の取ったメモに次の言葉があります、「1841年の『ナショナル』紙。バルベスに対する虐待、つまり、胸を足蹴にする。地下牢に移すためにひげと髪を掴んで引きずる。こうした忌まわしい行為を非難する、弁護士E・アラゴ、ファヴル、ペリエが署名した意見書。」これが全て正確かどうか、彼に問い合わせてください。感謝いたします。

ジュミエージュからの帰途、あなたはきっとカントルをお通りになられたことでしょうね？ クロワッセのすぐ傍でした！ だが、『黄金の森の伊達男たち』に免じて許して

あげます！ 満足していらっしゃいますか？ 順調にいらっしゃいますか？

ノジャンの住人たちがいつ発つのかまだ分かりません。彼らが出発すれば直ちに、つまり、今からほぼ3週間後に母と私は（もちろん、とりわけ私が）あなたのお出でを当てにしています。大げさではありません！ お見えにならなくてはなりません！ こんな長い間、会わずにいるのは愚かすぎます。

この前の手紙であなたの番地を間違えて書いたのではないのでしょうか。それでも、受け取っていらっしゃいますね？

では近い中に。愛をこめて。あなたを抱擁いたします。

Gve. フロベール⁽¹⁶⁾

[手紙63]⁽¹⁷⁾ サンドよりフロベールへ

パリ

[1867年] 10月1日火曜日

親愛なる友へ。

お求めになっている情報は手に入りましょう。昨夕、ペイラ*に依頼しました、今日、バルバスに手紙を書きます。彼があなたに直接答えてくれましょう。

私がどこから戻ってきたとお思いですか？ ノルマンディー地方からですよ！ 6日前、またとない機会が私を連れ出してくれたのです。以前、ジュミエージュが私を夢中にさせました。今回訪れたのはエトルタ、どんな村にもまして美しいイポール、フェカン、訪れたことのあるサン＝ヴァレリー、そして私を驚嘆させたディエップとその周辺、アルク城、リムの街です。なんと素晴らしい地方でしょう！ これで私はクロワッセのすぐ近くを2度通ったこととなります。あなたに大きな口づけを送りました。あなたが自由になったら、ご一緒にもう一度海辺に行き、あなたの家であなたとおしゃべりする準備はすっかりできています。私が独りきりでしたら、古いギターを買って、あなたの母上の窓の下でロマンスを歌ったことでしょう。でも、あなたの許に大家族**を連れていくわけにはいきませんでした。

私はノアンに戻ります、心からあなたを抱擁します。

G. サンド

『黄金の森』はうまく行っていると思いますが、なにも知りません。私はパリにいながら、英仏海峡沿岸にいるような暮らしをしていますから、なんについてであれ、私の耳にはほとんど入りません。海が見渡せるリムの広大な要塞に生い茂った丈の高い草の

中でリンドウの花を摘みました——ちょっと素適でした。私は老馬のように歩き、すっかり幸せな気分で戻ってきました。(17)

* ジャーナリスト、『ナショナル』紙や『プレス』紙に寄稿。後に政治家。

** ジュリエット・ランベール、エドモン・アダン、ジュリエットの娘アリス・ラ・メシヌ

サンドは10月1日付けのバルベスへの手紙にフロベールの〔手紙62〕を同封し、フロベールの問いに直接答えてくれるよう認め^{した}た(18)。そしてバルベスは10月2日、依頼どおり、フロベールに亡命先のハーグから、かつての獄中の日々を率直に書き送った。

一方、前出のペイラは10月1日、サンドにあてて、1841年、モン・サン＝ミシエルの牢獄でバルベスが確かに虐待されたこと、また、その興味深い詳細を綴った小冊子が必要であれば、2、3日後には届けられるであろう、と返答(19)。サンドはこのペイラの手紙の下に、次の数行を書き加えて、フロベールに送る。

〔手紙64〕

私は書物を受諾しました。手に入り次第、あなたにお届けします。

G. サンド(20)

〔手紙65〕 フロベールよりサンドへ

クロワッセ

〔1867年10月8日〕火曜日、夜

感じのいい、魅力的な手紙を私に書いてくれたバルベスへの感謝の言葉をここに認め^{した}ました。私には愛国的な過去が全くありませんし、彼が自由のためにその命を街頭で危険にさらしていたとき、私は静まりかえった書齋の中で自分の文章を大声でどなっていましたから、好感を抱いていることを彼に言うべきではないと思いました、そんなことをすれば、追従者のように見えたことでしょう。この人物を私に高く評価させたのは、処刑を覚悟していた日々の（彼自らが語った）話です。彼はバイロン卿を読み、パイプをふかしました。十分に廉潔です。結局、彼は単刀直入に、プルタルコス風の人間と

して「自由」を愛したのです。ああ、他の者たちが(そして、われわれほとんど全てが)大道を見失っていたときに、彼はその大道を進んでいたように私には思われます。

人々はそこに、徐々に、そして、そのほかのすべてが、つまり宗教問題がかかっている道を通ってうまく戻るでしょうか？ イタリアでやがてなにが起ころうとも、後にフランスにとってその結果がどうなろうとも、死期に、臨終のあえぎに達しているのは恩寵の統治です。「正義」は地平線に昇っています。すべてうまく行くでしょう。

48年に関して私が取ったメモを読み返して、聖職者諸氏が保持していた途方もない地位と大きな影響力に今さらながら驚いています！ もはや結末に驚きはしません。

ともあれ、一体いつ、お目にかかれるのでしょうか！

ノルマンディー地方にいらっしゃりながら、私に前もって知らせてもくださらず、ルーアンを通過なさるとはなんと奇妙なお考えでしょう！ そのような行為には釈明が必要です！

シャンパーニュからの客人たちは今もここにいます。しかし、1週間後にはもう発っていることでしょう、それでも…

ともかく、あなたにお目にかかりたくてなりません。そういうことです、あなたを抱擁いたします。

年老いた

Gve. フロベール⁽²¹⁾

* * *

経済恐慌、メキシコに対する武力干渉の失敗、ローマ問題と、昏迷^{こんめい}の度を深めていく内外の情勢や、指導力を失ったあさましく無能な政治家たちの姿に、人間の愚劣さ、滑稽さへの思いを一層強くしながら、2人はまさに老吟遊詩人としての言葉を交し続ける——とりわけ、孤独感にさいなまれるフロベールにとって、〈大切な先生〉とのこのおしゃべりは、偽善がはびこる下劣な人間社会から無数の傷を受け続ける心をわずかなりとも癒すものではなかったか。

いずれにしても、心に浮かぶままに書きつけた、これらの語らいを通して、作家フロベールと作家サンドがきわめて自然に浮かび上がる。

〔手紙66〕 サンドよりフロベールへ

ノアン

〔1867年〕10月27日

ノルマンディー地方で目にしたものについて、風景画家としての印象を数頁にまとめたところ。この文章は少しも重要ではありませんが、そこに、私のどの言葉より巧みにこの地方を描き出していると思われる、『サランポー』の3行を引用符をつけて挿入することができました。それは、巨匠の一筆のように私の心を打ち続けてきたものです。この箇所を見つけ出そうとページを繰ったために、当然のことながら、ほとんど全部を読み直しました。これが、今まで書かれた最も美しい本の1冊であるという確信は変わりません。

私は元気です、この冬、南フランスで遊んで暮らせるよう、迅速かつ大いに仕事をしています。でも、カンヌの悦楽はどんなものでしょう。それに、没入する心はどこにあるでしょう？

今、このとき、法王のために人々が争っていることを思うと、私の精神は靴墨入れの中にあります。ああ！ イジドール！*

今月、私のノルマンディー、つまり、私の心の大きな、大切な友人にもう一度会いに行こうとしましたが、果たせませんでした。私がそんなに早く子供たちのもとを離れるのであれば、私を殺してしまうとって彼らが脅迫したのです。今、たくさんの人々がここノアンに到着しています。到着を知らせてくれないのはあなただけです。あなたがいらっしゃればどんなに素晴らしいことでしょう！ 来月には、あなたがどこにいらっしゃるともお会いできるよう奮闘するつもりです。それまでの間、あなたを非常に愛します。

ところで、あなたの方はいかがですか？ 仕事は？ 母上のご健康は？ あなたの健康は？ あなたの便りが無いのを寂しく思います。

G. サンド⁽²²⁾

* ナポレオン3世の綽名

サンドがノルマンディー地方の景観の印象をとりわけ記しているのは、ミシェル・レヴィ版(1868年)で240頁から244頁にかけての箇所であるが、そこに『サランポー』の第4章から6行分が挿入されている⁽²³⁾。

〔手紙67〕 フロベールからサンドへ

クロワッセ

〔1867年10月〕30日、水曜日

大切な先生、

昨夜、あなたの「大変優しい手紙」を受け取り、胸が熱くなると同時に恥じ入りました。私は最初のお手紙に返事を書かなかった情けない男です。どうしてそんなことになったのでしょうか？ 普段はきちょうめんにお返事しますのに。

仕事はかなり順調に進んでいます。2月中に第2部を仕上げたいと思っています。しかし、2年後に全て完了しているためには、今からその時まで、あなたの老人は椅子から離れるわけにはいきません。こういうわけで私はノアンをお訪ねしないのです。1週間の休暇は私にとって3か月の夢に相当します。あなたやご家族やペリー地方や、私が目にするありとあらゆるものことしか考えなくなりましょう。私の哀れな精神は航路を離れてさまようことになりましょう！ 私にはそれほどわずかな力しかありません。私はそれほど情けない男なのです！

『サランボー』についてのあなたの優しい言葉が私に与えた喜びを隠しはしません。あの本は転位法をいくらか取り除く必要があります、だから、しかし、そしてという言葉が多すぎますから。細工が感じられるのです。

今、取り組んでいる小説については、構想に欠陥があるのではないかと心配しています、これは取り返しのつかないことです。こんな優柔不断な性格の人物たちが果たして興味を引くでしょうか？ 分かりやすい事物、際立った情熱だけが大きな効果を上げます。しかし、私には近代社会のどこにも分かりやすさが見えないのです。

悲しい世の中です！ イタリア問題はなんと嘆かわしく、また、哀れなまでに滑稽なんでしょう！ 命令が出されればきまって撤回され、その命令撤回のまた取り消しがなされる！ どう考えても、地球は非常に劣った惑星です。

オデオン座での再演に満足なさっているのか、私におっしゃいませませんでしたね？ 南フランスにはいつお出かけになるのです？ それに南フランスのどこにです？

今日から1週間後、つまり11月7日から10日までパリにいます、オトゥイユ*を気ままに歩いてその隅々を目にする必要があるのです。ご一緒にクロワッセに戻ることができれば素晴らしいでしょうに！ あなたの2度のノルマンディー旅行を私が大いに恨んでいるのはよくご存知ですね。

それでは近い中に、そうですね？ 本当ですよ！ あなたを愛しているように、つまり、非常に優しくあなたを抱擁します。大切な先生。

Gve. フロベール

フロベール夫人からサンドへ。

親愛なる夫人、私のような年老いた平凡な人間のことをまだ覚えていてくださいます
てありがとうございます。

かしこ

Cne. フロベール

あなた様にお目にかかりたく存じます。近々のお出でをお待ち申し上げます。(24)

* フレデリック（『感情教育』の登場人物）はオトゥイユの別荘にアルヌー夫
人を訪れる。

〔手紙68〕 フロベールよりサンドへ

クロワッセ

〔1867年〕12月3日、火曜日

これは心優しいこととは思われません。もうすぐ2か月になるというのに全く便りが
ありません!!! なぜです？ 私は心配になり始めていますよ。

これがあなたに申し上げなければならないすべてです、大切な先生。それから、あな
たを非常に強く抱擁します。

年老いた

Gve. フロベール(25)

〔手紙69〕 フロベールよりサンドへ

クロワッセ

〔1867年12月18—19日〕水曜日、夜

大切な先生、親愛なる善良な友、

「少しばかりドザンヴァルの話をしましょう！」チエール氏に反対の叫び声を上げま
しょう！*

彼以上に勝ち誇った愚か者に、下卑たかさぶた持ちに、糞のようなブルジョアにお目
にかかれるでしょうか！ 断じて否！ブルジョアジーの汚穢きわの上で、自らの愚かさを
丸めている、この駆け引きにたけた古びたメロンが私に催させる吐き気を表現すること

はできません！ 哲学、宗教、民族、自由、過去と未来、歴史、そして博物学、あらゆるものをこれほど無邪気で、ばかげた無造作なやり方で扱うことが一体、可能でしょうか！ 彼は私には「凡庸」そのもののようによ永遠不変に思われます！ 彼は私を打ちのめします。

しかし、見事なのは、彼が48年に一杯食わせた、律気な国民軍ですよ！ またぞろ彼を喝采し始めているではありませんか！ なんと際限のない「狂気の沙汰」でしょう！

このことは「全て」が「気質」にあることを証明しています。娼婦たちは、フランスと同様、いつだって老練な放蕩者に目がありませんからね。

もっとも、私の小説の第3部に（6月の日々が続いた反動のところで）彼の著書『所有権論』に対する賛辞を挿入するよう努めましょう。私に満足してくれることを期待して。

後世から馬鹿者と見なされる危険をおかさずにこの世のさまざまな事物について、自分の意見を時に表明するにはどういう形式を取るべきでしょうか？ これは骨の折れる問題です。最善の方法はわれわれを激怒させるこうした事物を全く率直に描き出すことだと思います。詳しく分析するのは一つの復讐です。

いずれにせよ、私が怨んでいるのは彼でもなければ、他の人間でもありません。「われわれの仲間」です！ ネオ・カトリシズムの説く小径を進まずにヴォルテール氏の大道を歩いていけば、「友愛」をあれほど説き勧めずに「正義」をもう少し考慮していれば、「農業共進会」を後まわしにして「上流」階級の「教育」に専念していたら、つまり、「腹」より「頭」を上置いていたら、おそらくこんな有様にはならなかったでしょう。

今週、ビュシェの『議会史』の序を読んだところです。今日、われわれがその重みに耐えている多くの愚劣事がとりわけここから生まれ出たのです。

それから、私が「私の老吟遊詩人」のことを考えないとおっしゃるのはよくありません。では、一体誰のことを考えるのです？ 多分、私の本をですか？ しかし、それはもっと困難で、楽しさの少ないものです。

いつまでカンヌに滞在なさるのです？ ランベール夫人を羨んでいます。カンヌの後でパリにはお戻りにならないのでしょうか？ 私は1月の終わり頃、上京する予定です。

1869年の春までに私の本を終えてしまうためには、その時まで1週間の休暇も自分と与えてはいけません！ これがノアンにどうしても行かない理由です。相変らずアマゾン話です。彼女たちは弓をうまく引くために自分の乳房をつぶします。良く考えてみてそれはそんなに有効な方法でしょうか？

さようなら、大切な先生。手紙をください、愛をこめてあなたを抱擁します。

Gve. フロベール

今、3時です。昨年のおれおれの夜食を思い出しながら、ココアを飲みに行きます。もう一度ありはしないでしょうか？ 母は「大層愛している」サンド夫人の話をしばしば私にします。⁽²⁶⁾

- * A. ジャコブによれば、チエールはとりわけ、12月4日の立法議会で、〈教皇擁護〉〈イタリア統一反対〉を表明した（前掲書、162頁）。

〔手紙70〕 サンドよりフロベールへ

ノアン

〔1867年〕12月21日

ついに、あの下劣な政治家に関して私と同じ考えの人を見出しました。それは、私の心の友であるあなたを除いてはありえないことでした。糞のようなという表現はこの種のろくでもない植物を分類するこの上ない言葉ですよ。対立のしるしには、それが何であれ、また、それがどこに由来するものであろうと、そのことごとくにひれ伏す仲間や気のいい男たちが私のまわりにはいます。彼らにとってこの思想のない軽業師は神にも等しいのです。もっとも彼らは鳴り物入りのあの演説以来、尻尾を巻いていますよ。それは少し度が過ぎると気づき始めています。議会の王国を征服するためにそのおかしな男が皆の前で、彼の屑拾いの袋を開けて、猫の死骸やキャベツの芯を取り出して見せるのはおそらく有益です。何人かの人間を教化することでしょうから。あなたがこの風船のように中身のない精神とクモの巣のような才能を詳しく分析するのはいいことです！ 残念ながら、あなたの本が世に出る頃には彼はきつとくたばっていて、それほど危険な人物ではないでしょう、こうした人間は何一つ後に残さないものですからね。けれども、権力の座についているかもしれません。あらゆることが予想できます。そうだとすれば、教訓は役に立ちましょう。

弓を引くために胸をつぶす必要があるという、あなたの考えには賛成いたしません。私は全く反対の信念を自分専用に使っていますし、これは他の多くの人々にとって、おそらくは大多数の人に有効だと思います。『両世界評論』誌のために書いた小説*でこの点に関する私の考えを展開したところです。これはアブーの小説**の後に掲載されることになっています。芸術家は可能な限りその本性にそって生きるべきだと私は思います。戦いを好む者には戦争を。女性を好む者には愛を。私のように自然、旅、そして花々や岩、壮大な景色、子どもたち、家庭を好む年老いた者には心を感動させるあらゆる

るものを、精神の衰えと戦うすべてのものを。芸術には、絵の主題に従って穏やかであったり、あるいは、強烈な色調で常にあふれているパレットが必要だと、また、芸術家は、すべての人がほかの楽器の前に演奏すべき楽器であると思います。けれども、こうしたことすべては、すでに多くを獲得し、もはや同化するだけの、あなたのような類の精神にはおそらく当てはまりません。私が強調したいのは一点だけ、つまり、肉体的存在は精神的存在にとって必要だということ、そして、あなたがいつか健康を損なって仕事を中断し、熱意を失わざるを得なくなりほしくないかと心配しているということですよ。

やっと、あなたは1月初めにパリにいらっしゃるんですね。お会いできますね、私は元日以降に上京します。子どもたちが元日を一緒に過ごすよう私に誓わせたのです。旅行したくてうずうずしているのですが、抵抗できませんでした。子どもたちは本当に優しいのです！ モーリスは陽気で、次から次へと創作しています。マリオネットの舞台に素晴らしい装置や、効果、仕掛けをこしらえました。この見事な箱で上演するのはこれまで聞いたことのない型破りな芝居です。最新のものは『1870年』という題です。この芝居には権力の座を奪回し、教皇位を回復させるためにカラブリアの山賊たちを指揮するアントネッリ枢機卿と共にイジドール***が登場します。すべてがそれ相応です。最後には未亡人のユジェニーが、ただ一人残った君主の偉大なトルコ人****と結婚します。彼がかつての民主主義者であることは確かです。仮面をつけた大勝利者に他ならないことが観客に分かります。こうした戯曲が朝の2時まで続き、皆、興奮して出てきます。5時まで夜食が続きます。

上演は週に2度です。残りの時間は仕掛けを作ります。芝居は同じ人物が登場し、前代未聞の冒険を重ねながら、続くのです。観客は8人から10人の若者、私の3人の甥の息子たち、それに古くからの友人の息子たちです。皆、大声で叫ぶほど熱中しています。オロールは許されていません、こうした遊びはその年齢にふさわしいものではないからです。私はへとへとに疲れるまで楽しんでいきますよ。あなたも夢中になって楽しむこと請け合いです。というのも、この即興劇には、奔放な想像力と見事な無頓着さがあるからです。モーリスが彫った人形たちはまるで生きているようです。現実的でもあり、また、到底ありえないような滑稽な生活を送ります。それは夢に似ています。

これで、私がこの2週間、どんな風に暮らしているかお話ししました。もう仕事をしていません。モーリスが、彼の休息の時期に完全に一致している私の休息期間にこうした気晴らしを与えてくれるのです。彼は科学に専念しているときと同じ熱意と情熱を注ぎます。真実、幸せな性格ですよ、一緒にいて倦きることは全くありません。(…)

小さなオロールは非常に聞き分けがよく、思慮深い性格のようです、言われることを素晴らしくよく理解し、2歳の分別に従っています。それは本当に並外れています、こん

なことを私は一度として目にしたことはありません。この小さな頭脳の働きに大きな落着きを感じられないとすれば、心配にさえなりましょう。

まあ、私はあなたになんて長々とおしゃべりしていることでしょうか！ こんな話はあなたを楽しませますか？ 取り留めのないおしゃべりの手紙があなたにとって、2人で取ったあの夜食の代りとなるように、あなたが楽しんでくださることを望みます。私も同じようにあの夜食をなつかしく思っています。ここであなたと一緒に取る夜食は十分おいしいことでしょう、生活のための生活に誘い込まれないような、出不精の人間であなただけなのであれば、の話ですが。ああ！ 休息を取っているときは、仕事も論理も分別もなんと奇妙な話に思われることでしょうか！ この厄介事にもう一度戻ることが果たして可能でしょうか。

私の大切なあなたを優しく抱擁します。モーリスはあなたの手紙が大変見事だと感じ、すぐさま彼の第一の哲学者*****の口に文章や言葉を詰め込むつもりです。彼をとりこにしている「糞状の」「糞の性質をもった」、「糞を生じる」を忘れることはありません。彼はこの言葉のためにあなたを抱擁するようと言います。

あなたを愛しているあなたの老吟遊詩人

J・ランベール夫人は本当に魅力的です。あなたも大好きになられましょう。それに、あちらでは18度です、当地では雪の中の外出です。難儀ですから、私たちはほとんど外出しません。私の犬も、おしっこにさえ行こうとしません。とはいえ、ひどくつまらない存在ではありません。バダング*****と呼ばれると、恥入り、絶望して地面に寝そべり、一晩中、膨れっ面をしているのですから。⁽²⁷⁾

* 『メルケム嬢』（『両世界評論』誌に1868年1月15日から3月15日に掲載）

** 『田舎の結婚』

*** 既出

**** トルコ皇帝アブド・アルアズィーズ

***** マリオネットの人物、バランダール

***** ナポレオン3世の綽名

—— 続 ——

使用したテキストは以下の版である。

George Sand Correspondance XX

(éd. de Georges Lubin, Classiques Garnier, 1985)

Gustave Flaubert Correspondance 3

(éd. du Club de l'Honnête Homme, 1975)

Gustave Flaubert—George Sand Correspondance

(éd. d'Alphonse Jacobs, Flammarion, 1981)

[注]

1. lettre de Flaubert à Jules Duplan datée du 12 juin 1867 (*Correspondance 3*, p. 357)
2. lettre de Flaubert à Sand datée du 12 juin 1867 (*ibid.*, pp. 358-359)
3. *G. Flaubert-G. Sand Correspondance*, éd. d'A. Jacobs. p. 142.
4. ex. lettres datées du 2 déc. 1874, du 16 déc. 1875, du 6 fév. 1876.
5. lettre datée du 8 déc. 1874.
6. lettre de Sand à Flaubert datée du 14 juin 1867
(*Correspondance XX*, pp. 431, 433-435)
7. lettre de Flaubert à Sand datée du 18 juillet 1874
(*op. cit.*, p. 365)
8. éd. d'A. Jacobs, *op. cit.*, p. 148
9. lettre de Sand à Flaubert datée du 24 juillet 1867
(*op. cit.*, pp. 468, 469)
10. lettre de Flaubert à Sand datée du 27 juillet 1867
(*op. cit.*, pp. 367-368)
11. lettre de Sand à Flaubert datée du 6 août 1867
(*op. cit.*, pp. 483-484)
12. lettre de Flaubert à Sand datée des 12, 13 nov. 1866
(*op. cit.*, p. 303)
13. lettre de Sand à Flaubert datée du 21 on 22 août 1867
(*op. cit.*, pp. 495, 496)
14. lettre de Flaubert à Sand datée du 25 août 1867
(*op. cit.*, pp. 372-373)
15. 拙稿『ジョルジュ・サンド—ギュスターヴ・フロベール往復書簡を読む (III)』
(九州産業大学国際文化学部紀要第9号, 平成9年7月)
16. lettre de Flaubert à Sand datée du 24-25 sep. 1867
(*op. cit.*, p. 379)
17. lettre de Sand à Flaubert datée du 1^{er} oct. 1867
(*op. cit.*, pp. 546-547)
18. lettre de Sand à Barbès datée du 1^{er} oct. 1867

- (ibid., pp. 545-546)
19. lettre de Peyrat à Sand datée du 1^{er} oct. 1867
(ibid., p. 550. n.)
20. lettre de Sand à Flaubert datée du 2 oct. 1867
(ibid., p. 550)
21. lettre de Flaubert à Sand datée du 8 oct. 1867
(op. cit., p. 580)
22. lettre de Sand à Flaubert datée du 27 oct. 1867
(op. cit., p. 585)
23. (...) Le moindre pâturage est une forêt vierge, et l'amour avec lequel on y a pressé et enfoui les maisons donne une idée de ce que pouvait être la vieille Gaule au temps où l'homme, vivant de pêche et de chasse, était loin de faire la guerre aux arbres et aux épais buissons, fortifications naturelles qui cachaient son refuge à l'ennemi du dehors. Dans ce temps-là, il n'est pas probable qu'on habitât beaucoup les lieux découverts, et qu'on eût trouvé la science des talus artificiels portant de triples rangées d'arbres destinées à amortir les coups de l'aquilon et à protéger l'étable, le hangar et le bataillon sacré des pommiers à cidre. On vivait plus simplement sous le chaume, tapi lui-même sous les longues ramures du chêne dix fois séculaire. Le Gaulois Matho devant Carthage, accablé de chaleur, «râlant d'épuisement et de mélancolie, songeait à la senteur des pâturages par les matins d'automne, aux beuglements des aurochs perdus dans le brouillard, et, fermant ses paupières, il croyait apercevoir les feux des longues cabanes, couvertes de paille, trembler sur les marais, au fond des bois.» (*Mademoiselle Merquem*, pp. 241-242)
ここで、〈ガリア人 Mâtho〉とあるのは Sand の誤り。正しくは Autharite。
24. lettre de Flaubert à Sand datée du 30 oct. 1876
(op. cit., pp. 382-383)
25. lettre de Flaubert à Sand datée du 3 déc. 1876
(ibid., p. 388)
26. lettre de Flaubert à Sand datée du 18-19 déc. 1876
(ibid., pp. 392-393)
27. lettre de Sand à Flaubert datée du 21 déc. 1876
(op. cit., pp. 642-645)